

●三面川の鮭文化

三面川は、昔から鮭との関わりが深く平安時代初期の『延喜式』には、越後国の鮭が朝廷に献上された記録が残されており、旧村上城下の人々からは、「母なる川」や「イヨボヤの川」と呼ばれて親しまれ、三面川に鮭が遡上する時期になると現在も伝統漁法である居繰り網漁が行われており、この漁をする光景は初冬の風物詩となっています。

江戸時代当時、村上藩では、年貢米とともに様々な種類の雑税がありましたが、三面川の鮭漁は、村上藩の管理のもと町人に対し入札制で行われ、落札した請負人が納める運上金は、村上藩の大きな収入源となっていました。間部詮房が村上城主として入封した享保2年(1716)の運上金は、304両と銭6貫560文でしたが、その後、漁獲量が年々減少し元文元年(1736)には、5両3分となり入札を止めざるを得ない事態となったことから村上藩の下級武士であった青砥武平治を中心に鮭が多く捕れるための研究が行われ、鮭が産卵のために生まれた川へ帰ってくる「母川回帰」の習性に着目し、鮭が産卵しやすいようにするための分流「種川」を整備することで、鮭の漁獲量は次第に増加し運上金の額も漸次増加しました。この分流を整備する「種川の制」は、世界初の鮭の自然ふ化事業と考えられています。また、明治11年(1878)に内務省勸農局(現農林水産省)の金田帰逸の指導を受け、村上藩士族は育卵場と称する孵化場を建設し、その孵化場では、三面川で漁獲した鮭から採卵し孵化させ、翌年春に三面川へ放流しており、この三面川の鮭の人工ふ化事業は、日本では最初のことであるとされています。村上藩の財政を支え、明治時代以降の村上本町(旧武家町)、村上町(旧町人町)の発展に大きく寄与した三面川の鮭は、江戸時代から現在に至るまで、この地域の人々にとって重要な自然の恵みであり、それと同時に、村上城下では鮭を大切にしたいから多様な鮭の文化や生業を育んできました。村上城下の鮭を用いた代表的な郷土料理「塩引き鮭」は、当地域特有の気候と風土により時間をかけてじっくりと発酵熟成してできるものであり他の地域では真似ることができません。塩引き鮭を作る過程でも、

城下町ならではの加工方法が現在も用いられており、鮭を吊るす際には頭を下に向け腹を切る際には腹の全てを切らず一部を残す「止め腹」が用いられています。これは頭を下に向けることで首つりの連想を避けることと切腹を忌んだものといわれています。

三面川の畔に建つイヨボヤ会館では、初冬の時期になると塩引き鮭を作る体験イベント「越後村上三ノ丸流鮭塩引き道場」を開設し、歴史的建造物が多く現存する出羽街道沿線の庄内町の通りでは「塩引き街道」と称し町家の軒下に吊るされた塩引き鮭を間近で見ることができます。



上「村上鮭産育卵場の図」
下「三面川鮭居繰り網の図」

村上遺産

MURAKAMI HERITAGE

まち歩き 城下絵図



武家町



町人町

村上市は、新潟県の最北部に位置し、北東部は朝日飯豊連峰の山々が連なり、西部は50kmにも及ぶ美しい日本海の海岸線が続く水と緑にあふれる自然豊かな地域です。当地域は、村上城の城下町を中心に出羽街道、三国街道中通り、米沢街道等の街道沿線の宿場町や集落、荒川や石川等の河口に北前船の寄港地として栄えた港町等が形成され発展した地域で、これらの町や集落には歴史的な建造物が現存し歴史的な町並みも数多く残っています。また、それらの町や集落では、地域固有の歴史や文化的な資源を活用した村上堆朱や村上茶、しな布などの産業や村上まつりや岩船まつり等の祭礼行事、大須戸能等の独自の民俗芸能、習俗等が現在も受け継がれており歴史や文化を感じることができる地域でもあります。



●村上城下町の歴史(成り立ち)

- | | |
|-------------|--|
| 保安元年(1120) | 右大臣中御門宗忠の日記『中右記』に小泉庄(現村上市)の名が見える |
| 永万元年(1165) | 瀬波川(現三面川)の鮭漁について院宣が出る |
| 建永元年(1206) | 本庄氏の祖である秩父氏が小泉庄の地頭として下向 |
| 永正6年(1509) | 『靈樹山耕雲寺納所方田地之帳』に村上の地名が初めて見える |
| 天文9年(1540) | 本庄繁長が猿沢より本庄城(村上城)に移る |
| 天正18年(1590) | 本庄繁長が村上領を没収され直江兼統の弟大谷実頼が本庄城主となる |
| 慶長2年(1597) | 上杉氏が『越後国瀬波郡絵図』を作成 ※村上町軒数252軒 |
| 慶長3年(1598) | 豊臣秀吉の命で村上頼勝が加賀小松から入封し城下町の基礎を整備 |
| 元和4年(1618) | 堀直奇が越後長岡から入封し城普請とともに城下町を整備 |
| 元和6年(1620) | 堀直奇が江戸藩邸で栽培されていた茶の種子を移植し栽培 |
| 〃 | 村上町の大年寄徳光屋左衛門が宇治より茶の種子を買い求め栽培 |
| 寛永10年(1633) | 西奈弥羽黒神社が現在地に造営され村上まつりが始まる |
| 寛永16年(1639) | 堀氏により『村上御着到』が作成され、塗師の名が初めて見える |
| 慶安2年(1649) | 松平直矩が播磨姫路から入封し城下町を拡張 |
| 寛文3年(1663) | 村上城天守(三層唐破風付き)が再建 |
| 寛文7年(1667) | 落雷により村上城天守が焼失 ※以後、天守は再建されず |
| 元禄2年(1689) | 松尾芭蕉が曾良とともに村上城下を訪れる |
| 〃 | 三面川の鮭漁が運上制となる |
| 宝永2年(1705) | 本多氏により『村上十五万石御領内』の帳が作成される |
| 〃 | ※村上城下軒数831軒 |
| 享保2年(1717) | 徳川家宣、家継の側用人であった間部詮房が上野高崎から入封 |
| 享保5年(1720) | 徳川家康の異母弟内藤信成を祖とする内藤式信が入封し、以後幕末まで内藤氏が統治 |
| 寛政9年(1797) | この頃までに三面川の鮭の自然増殖システム「種川の制」が整備される |
| 文化15年(1818) | 浄念寺本堂が建立される |
| 嘉永2年(1849) | 藤基神社社殿が建立され、有磯周斎が彫刻を施す |
| 安政6年(1859) | 澁波重兵衛が山城宇治より職工を雇い宇治茶の製法を導入 |
| 慶応4年(1868) | 村上藩、奥羽越列藩同盟に加盟し新政府軍と交戦、村上城落城するが城下は戦火を免れる |
| 明治4年(1871) | 廃藩置県により村上藩から村上県となり、のちに新潟県に統合 |
| 明治11年(1878) | 孵化場を建設し日本初とされる鮭の人工ふ化事業を実施 |
| 明治22年(1889) | 市町村制施行により村上城下が旧土族の村上本町と旧町人の村上町の二町となる |
| 大正3年(1914) | 羽越線の新発田一村上間が開通し村上駅開業 |
| 昭和21年(1946) | 村上本町と村上町が合併し村上町となり村上城下が一町となる |
| 昭和29年(1954) | 村上町、岩船町、瀬波町、山辺里村、上海府村が合併し村上市が誕生 |
| 平成20年(2008) | 村上市、荒川町、神林村、朝日村、山北町が合併し新村上市が誕生 |

この「まち歩き城下絵図」は、平成28年10月に主務大臣より認定を受けた「村上市歴史的風致維持向上計画」に基づく歴史まちづくり事業の一環として作成したもので、この計画は、村上市ホームページにて公開しています。
発行日：平成30年1月(改訂：平成31年1月) 発行者：村上市都市計画課

●村上城下町の成り立ち

越後北部（現新潟県下越地方）に位置する当地域は、戦国時代に入ると揚北衆と称された国人領主が各地に割拠し、大川氏（府屋城）や鮎川氏（大葉沢城）、本庄氏（村上城）、色部氏（平林城）などが勢力を争っていた地域です。揚北衆は、越後守護上杉氏に対してもたびたび反抗するなど独立色の強い存在でしたが、永禄 11 年（1568）の本庄繁長の反乱以後は上杉氏の支配が強まり、天正 18 年（1590）に本庄氏が改易となった後は、上杉景勝の重臣である直江兼継の弟の大国実頼が村上城主となり城代として春日元忠が入城しました。その後、慶長 3 年（1598）上杉景勝の会津移封に伴い村上頼勝が 9 万石で入封し、大規模な城普請とともに城下町の整備が行われています。この城下町の整備の際に、町人町である大町や小町が形成されたといわれています。



「越後国瀬波郡絵図」（慶長 2 年（1597））（米沢市上杉博物館所蔵）

江戸時代前期に村上氏や堀氏により整備された城下町の形態は、臥牛山の麓西側一体に武家町、その周辺に町人町や寺町が形成されました。現在の村上市役所庁舎付近に村上城の正面玄関である追手門が設置されています。現在も市街地内の各所で見られる筋違いの交差点や地割、城下町内の要所に設置された枿形跡などは、この時期にほぼ完成したとされています。

慶安 2 年（1649）に松平直矩が 15 万石で村上城主となり、これ以後、榊原氏を経て本多氏が移封となる宝永 6 年（1709）までは 15 万石の石高を有し、この頃に村上城下町の規模が最大になったとされています。本多氏の移封後は、石高が 5 万石へと減少し、以後、幕末期に至るまで村上領、幕府領、その他私領が混在し、それぞれの城、代官所、陣屋等を中心として領地の支配が行なわれました。幕末期の戊辰戦争に際しては、村上藩は奥羽越列藩同盟に加盟し旧幕府軍として戦闘に参加しましたが、慶応 4 年（1868）8 月に新政府軍の攻撃を受けて村上城は落城。しかしながら、村上藩最年少家老であった鳥居三十郎の主導により城下での戦闘が避けられたことから、江戸期に建造された若林家住宅（重要文化財）などの武家住宅や山上染物店（国登録有形文化財）などの町家、浄念寺本堂（重要文化財）などの社寺が数多く現存しています。

また、江戸期や明治、大正期などに建造された建造物とともに、城下町 4 点セットと呼ばれる城跡や武家町、町人町、寺町には城下町当時の地割や町並みが色濃く残り、その当時の面影を感じることができます。

●村上大工の匠の技術

村上城下町の骨格が形成された堀氏在城の寛永 12 年（1635）の記録には大工数 15 ～ 16 軒と記され、その後、宝永 2 年（1705）の『村上寺社旧例記』には大工数 175 人と記されており、城下町の発展とともに他地方から大工や鍛冶師などの様々な職人が移住し、村上城下に建築や彫刻、漆塗の技術が広まったと考えられています。享保 5 年（1720）に内藤式信が入封し、以後、約 150 年間に藤氏による統治の時代が続きますが、村上城下における大工技術は、この時期にさらに発達し技術を高めた大工は、いつの頃から「村上大工」と呼ばれるようになりました。

村上大工は、主に社寺建築を担っており、江戸時代、歴代村上城主の菩提寺であった浄念寺の本堂（重要文化財）には、「木造丈六阿弥陀如来座像」（市指定文化財）を安置する大きな宮殿（須弥壇）が作られ、頭貫木鼻には、龍の彫刻が付き、虹梁と頭貫の間の小壁は竜と雲の彫刻、欄間に鶴、須弥壇に亀、虹梁と柱の取付け部分に、松、竹、梅の彫刻が施されていて、化政期の芸術文化が見事に表現されています。また、村上藩主内藤家の祖である内藤信成を祀った藤基神社の社殿（市指定文化財）の虹梁や慕股、木鼻などの各所に彫刻が施されており、現在も匠の技術を感じることができます。

なお、大工などの職人が居住した町として大工町や鍛冶町などの町名が現在も残っており、細工町の町名は、初代村上城主村上頼勝とともに、加賀国小松（石川県小松市）から移住し、加賀国小松の町名が残ったものとされています。

●村上堆朱

村上城下では、江戸時代中期以降、建物の建築や彫刻とともに彫漆工芸が発展し、この代表が現在も伝承されている村上堆朱です。漆を幾重にも塗り重ねる堆朱は、中国の唐の時代に始まった技法で鎌倉時代に京都に伝わったとされ、当地では、歴代村上藩主が漆工を奨励し、漆奉行が設置されるなど漆樹栽培が活発になった江戸時代後期の文政年間頃に江戸詰の村上藩士頼宮次郎兵衛、沢村吉四郎が江戸の名工に彫刻を学び家中に伝えられたことが始まりとされています。

※次頁➡ につづく



上「藤基神社社殿の彫刻」
下「孫惣鍛冶店の店内」



やがて、この技術は、町方の職人にも伝わり、職人によって彫漆技術がさらに発達し、天保年間（1830 ～ 1844）には、矢部覚兵衛が彫刻を施された部分に漆を指先につけて塗る技法「指頭塗」を考案し、桂川三平は鎌倉彫の技法を取り入れ、江戸時代末期以降には、名工と称された有磯周斎が中国の漆芸の技法を研究し、鎌倉彫の彫法を取捨して改良するなど品位の向上を図り、現在の村上堆朱の礎が築かれました。村上堆朱は、明治期以降も技術改良が図られ、明治期から大正期にかけて全盛となり、戦時中は漆の統制があり堆朱業界は氣息奄奄たる状態でしたが、昭和 30 年（1955）2 月に新潟県の無形文化財に指定され、昭和 30 年（1955）3 月に国の記録選択となり、現在もその技法が保持され、菓子器や茶器、盆など日常生活において使用するための商品が制作されています。また、昭和 51 年（1976）2 月には「村上木彫堆朱」として通商産業大臣（現経済産業大臣）指定伝統的工芸の選定を受けているこの地域固有の産業です。

●北限の茶「村上茶」

村上市は、経済的な流通のある茶の生産地としては北限に位置しているとされており、茶摘みの姿や製茶作業の香りは新緑の時期の風物詩となっています。また、村上茶は、村上城下の祭礼行事である村上まつりや村上七夕まつりで唄われる村上甚句においても“村上は良い茶の出处 堆朱堆黒茶の香り”と表現され、村上城下に浸透していた文化です。

茶には、中国から入ってきて栽培された「栽培茶」のほか山間部などで自生していた「山茶」があるとされていますが、新潟県内では自生していた茶の記録がないことから、江戸時代初期に村上城下で栽培された茶が新潟県内での茶の栽培の始まりとされており、中には 150 ～ 300 年近く経つ茶の木もあります。

村上城下での茶の栽培の起源には諸説あり、江戸時代前期の村上城主堀直奇が、江戸駒込の藩邸で栽培されていた茶の種子を元和 6 年（1620）に村上城下に持ち帰り移植し栽培したと『堀鉄団公記』に記された説と、村上城下町の大年寄を務めていた徳光屋覚左衛門が、元和 6 年（1620）に伊勢神宮に参拝したおり、茶の種子を宇治（現京都府宇治市）より買い求め持ち帰り移植して栽培したとの説があります。

江戸時代の新潟県内各地の産物を相撲番付に見立ててつくられた『越後産物くらべ』には、前頭二枚目の欄に「むらかみノ茶」と記述があり、その当時から地域ブランド商品であったことがうかがえます。

明治 11 年（1878）には、村上製茶会社が組織され紅茶の製造も始められ、明治 23 年（1890）からは、磚茶の製造も行いロシアのウラジオストクに輸出を始め、明治 27 年（1894）には、村上茶業商会在組織され横浜の米国商人と売買の交渉なども行っていました。時代の流れとともに、市街地内の茶畑は減少しましたが、現在は、茶業に携わる若手の担い手により「村上茶研究会」が組織され、「北限の茶処」として栽培技術の向上、茶葉の収量増加など技術研鑽を行いながら村上茶の再興を図りつつ、茶に親しみながら村上茶の普及振興のための人材育成の取り組みとして「村上茶ムリエ」講習会や茶摘み体験も開催されています。

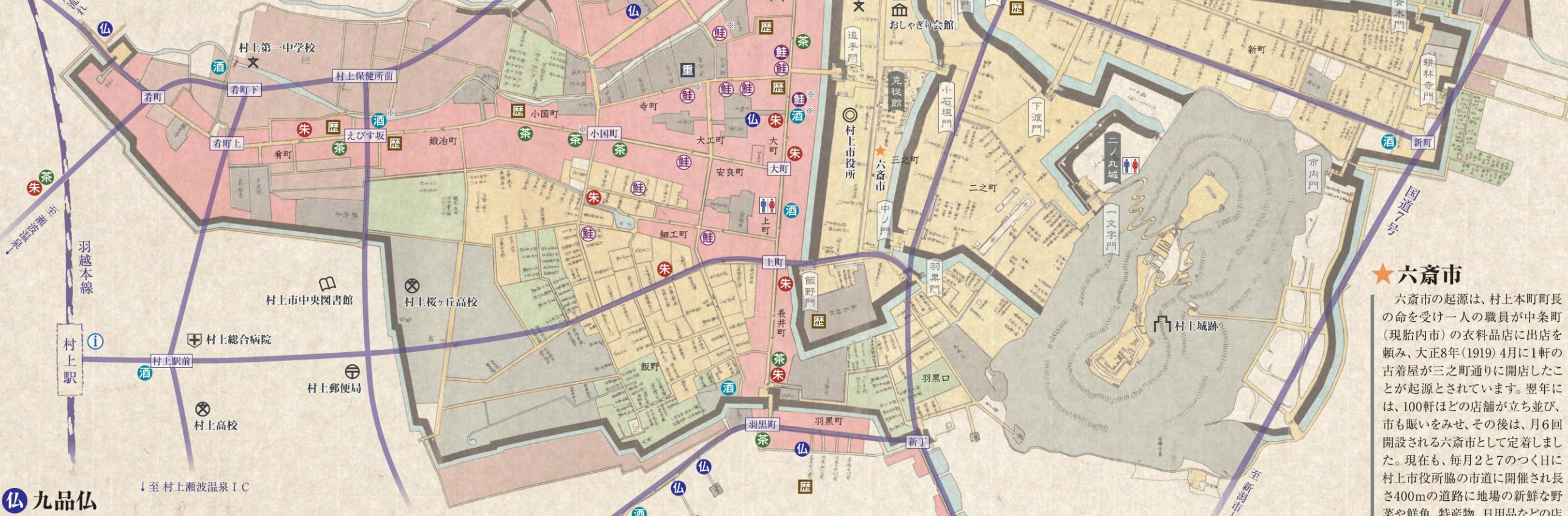


まち歩き城下絵図 (明治初年村上天城下絵図)

施設や店舗、交差点名を手掛かりに古地図を使って町並み散策

村上天城下町区域内には、城下町以後に新設整備された道路もありますが、城下町当時の地割(道路の形態)が色濃く残っていることから、寛政年間(1789~1800)に測量したものをもとに作成された明治初年村上天城下絵図に公共施設や当地域固有の歴史を感じる店舗、交差点を加筆した古地図を作成しました。

- 凡例**
- <明治初年絵図>**
- 土屋敷
 - 足軽長屋
 - 町屋敷
 - 山林原野草地
 - 道路
 - 社寺
 - 河川・堀
 - 如地
 - 土塁
- <店舗等>**
- 鮭料理店
 - 鮭加工販売店・加工場
 - 酒蔵・酒店
 - 堆朱販売店
 - 茶店・茶工場
- ※が付いた店舗等は、歴史的風致形成建造物を表す
- <歴史的建造物>**
- 重要文化財
 - 歴史的風致形成建造物



★六斎市

六斎市の起源は、村上本町町長の命を受け一人の職員が中条町(現胎内市)の衣料品店に店を出る頼み、大正8年(1919)4月に1軒の古着屋が三之町通りに開店したことが起源とされています。翌年には、100軒ほどの店舗が立ち並び、市も賑いをみせ、その後は、月6回開設される六斎市として定着しました。現在も、毎月2と7のつく日に村上市役所脇の市道に開催され長さ400mの道路に地場の新鮮な野菜や鮮魚、特産物、日用品などの店舗が約60店舗立ち並びます。

仏 九品仏

村上天城下の九品仏(石仏)は、1ヶ所にまとまって設置されていないことが特徴で、城下の入り口など9箇所に設置されています。この石仏は、宝暦8年(1758)に光徳寺の最善善理上人が、村上天城主内藤氏の家祖、内藤信成の150回忌供養のため村上天城下及び瀬波町に発願建立したもので、九品は、極楽浄土にある九つの階級であり、極楽往生するといずれかの浄土に行くことができるといわれており、九品仏はその浄土にいる阿弥陀の来迎の姿とされ、上品上生から下品下生までの九つの姿は印(手の形)の結び方が異なります。



※村上天城下町区域内には、8体の九品仏が設置されており、残りの1体は、旧瀬波町内の旧出羽街道沿いに設置されています。

凸村上天城

村上天城は、村上天城下町(現市街地部)の東側に位置する標高135mの臥牛山に築かれた平山城で中世から近世を通じて揚北地方(現新潟県下越地方)の中心的な役割を果たしていた城郭です。築城時期は不明ですが16世紀初期に国人領主である本庄氏が猿沢村(現村上市猿沢)から現在地に本拠地を移した頃と考えられています。中世期に臥牛山東面に築かれた腰曲輪や堅堀、土塁、井戸跡などの遺構とともに、江戸時代前期に村上天城主として入封した村上氏や堀氏により大規模な城普請により山上一帯に整備された本丸の天守台跡や二ノ丸の乾櫓、巽櫓、埋門、出櫓、平櫓等の石垣跡、三ノ丸には月見櫓、鞆櫓、千貫丸等の石垣跡が残り、石垣は最大で高さ8m近くに及ぶものもあります。このほか、山下には城主居館跡や下渡門の堀跡、藤基神社境内の土塁跡の一部なども残っており、中世と近世の城郭が混在した城郭です。なお、村上天城跡は中世から近世の城館跡として平成5年(1993)6月に国の史跡に指定されています。

※村上天城主であった松平直矩や榊原政倫、本多忠孝は、播磨姫路から移封又は転封した城主であり村上天城は世界遺産である姫路城とも関係のある城郭です。

